師匠のグッド・バイ

裏メニューの常連客〜真打〜

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18570417

R-18, モ腐サイコ100, エク霊, 霊幻総受け, モブお兄さん×霊幻, 輪姦, 淫語強制, 女装

高級娼婦から足抜けしようとする師匠とそれを手助けする悪霊のエク霊です。今回はもぶお兄さん×師匠のみが本番有りです。輪姦、淫語強制などがあります。お好きな方はよろしくお願いします。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

裏メニューの常連客〜真打〜

相談所は今まで通り、と思ってるのは霊幻ばかりで。
「師匠、次の除霊は僕を連れて行ってくださいね」
霊幻の手を取るシゲオ。
「ん？おお、スケジュール合えばな。確かこの日、お前部活の合宿無かったか？」
「……無いです」
すり、と霊幻の手をそっと指で撫でたのを俺様は見逃さない。
「霊幻さん、この除霊依頼があった写真なんですけど……」
「おー、どした〜？」
「あっ、触らない方がいいですよ」
ぐいっと腰を抱き寄せる芹沢。いや今の必要ねぇだろ。
こういう直接的な接触だけじゃねぇ。霊幻が油断している時に、這うような視線がシゲオや芹沢、律から注がれる。
めっっっっっちゃくちゃ性的に意識されてんぞ、霊幻。
「……一時的なもんだろ」
相談所で２人きりになった隙をみて、霊幻に忠告したが、手ごたえはあまり、無い。
「アイツらお前に告白して、許された気分になって歯止めが効かなくなってる。ちゃんと拒絶しないと取り返しのつかないことになるぜ」
「告白？……えっ、あれが？」
いやそれは俺様もそう思う。
「どうするんだよお前。ちゃんと振れよ」
「振るタイミングすら無かったと思うんだが……」
「うやむやにしたのはお前だぜ」
分かった、ちゃんと振る、と霊幻が言う。が、複雑そうな顔だ。
「なぁ……このまま、自然消滅するのを待っちゃダメかなぁ」
「は？」
「ほら……振られるのって、屈辱だろ……俺、あんまり、あいつらを悲しませたく無い」

馬鹿なのかコイツは。
「モブもさ、芹沢もさ、身近にいるのが俺ぐらいだから、選択肢が無かっただけなんだと思う。だってさ……２人とも、すごく、いい男だ」
心の中の宝石箱をそっと開くかのように、霊幻は手のひらをふわりと開きながら暖かくそれを見つめる。
「モブはこれから身長も伸びて、身体もしっかりしてくる。あいつの純朴で優しいところは、そうそう得られない魅力だ。あいつはいい男になる、間違いなく」
ふわふわと、たんぽぽの綿毛みたいに笑う霊幻。
「芹沢は、もう、充分いい男だよ。強くて、優しくて、逞しくて。スタイルだって抜群だ。あんなに頼りになる男はいない」
そっ、と２人を思い浮かべるように、霊幻は満ち足りた顔で目を伏せる。
「俺は、あいつらが幸せになるのを見たい」
それが、相談所を続ける、大きな理由だ。
だがな、霊幻。お前それを内緒話みたいに俺に言ってるけどな、

お前酔う度にその話みんなにしてっからな？

もちろん本人の前でもしてしまっている。その度にシゲオも芹沢も爆発しそうな顔になっている。
無意識にタラしこんでるんだよ、テメェ。
「あー……霊幻、例えばだけどな、誰かがとんでもなく気にしてるコンプレックスがあったとする」
例えば、危険な超能力があるとか。
例えば、……悪霊である、とか。
「……うん」
「そんなことを全く気にせずに、手放しで褒めて大事にしてくれるやつがいたとしたら、どうなると思う？」
ぼっ、と霊幻が赤くなった。
「お、おまっ、なんだよ、突然！」
霊幻が自分の顔を冷やすように手で隠す。

「……エクボはさ、俺がウリしてたこと、責めないし……そんなの関係ないって感じで接してくれるから……」
んんん！？ちがう、そっちの話じゃ……！
「……嬉しかったよ」
トロリ、とまた、あの溢れんばかりの愛情で満ちた目で見られて。俺様はしばしフリーズしてしまった。
「……いやだから、シゲオたちにもそれが当てはまる、って話で……」
「うん」
だめだ、今のポヤポヤしてる霊幻に言っても伝わる気がしねぇ。
「俺様は、シゲオや芹沢、律がそう簡単にお前を諦めるとは、思ねぇよ」
「んなこたねーよ」
苦笑する霊幻。が、俺様の勘が当たることにすぐなる。

※

「好きです師匠、付き合ってください」
手を握ってシゲオが告白する。
「いやだから、付き合えないって……」
「僕のこと嫌いですか？」
「そんなわけないだろう」
「じゃあいいじゃないですか！」
「いいわけないだろ！」
「それとも他に好きな人がいるんですか？」
「そういうわけじゃないが……」
「じゃあ僕でいいじゃないですか！暫定１位でしょ、僕！！」
「うっ……それは弟子としてだな……」
「師弟愛も愛の一種です！！」
「……っ、モブ。俺にお前は勿体無いよ。俺は、汚ない──」
はっとシゲオが息を呑む。
「きっとそれが、いつかお前を苦しめるよ。な、やめとけ」
シゲオが項垂れる。シゲオの中では、まだ霊幻が売春をしていたこ

とが消化できていないのだ。
「……きっと、平気になりますから……」
「無理すんなよ、モブ。な、俺にキスできるか？」
「えっ……」
「昨日汚ねぇオッサンのちんぽを喉まで咥え込んできて、口内射精されてきたこの口に、口付けできんのか、ってきいてんの」
「ゔ……っ」
思わず口を抑えたシゲオが、すぐ青ざめてハッとまずいことをしたという顔をする。
「……な？やめとけ」
少し寂しそうな霊幻から顔を背けて、シゲオは自分の定位置に戻る。
うん。
こんな感じのやりとり、もう５回目。
しかも芹沢も入れると８回目。
……ぜんっぜんフレてないんだよなぁ、霊幻！？
俺様、無い頭が痛い。
連中は焦っている。俺様の方が何歩もリードしてるからだ。
連中は霊幻の売春を『気にしない』でいようとしている。
が、俺様は霊幻の売春を『すげぇこと』だと思っている。
この差は、そうそうは埋められねぇだろうけどよ……。
「エクボ」
ふよふよと物思いに耽っていたら、ひそりと霊幻が俺に話しかけてきた。
手には『仕事』用の携帯。
「頼んだ」
さぁて。とうとう大トリの登場だ。

※※※※※

係留された、バカでかい貿易船。
そこに霊幻は呼び出されていた。
えーっと……何かの取り引きか……？

「アラタカ！僕のマリヤ、やっと逢えたね」
「モイ・ダラゴイ（※ロシア語でダーリン的な意味）！……今日は、あんまり嬉しくないことを言わなくちゃいけないんだ……」
「知ってるよ。話は僕の船で聞こう」
金髪碧眼のクッソ高いスーツを着たイケメンが、黒い手袋をした手を霊幻の腰に回す。
そのまま霊幻を巨大な貿易船に連れ込む。
遠くで無力に待機してるマサが、祈るようにタバコの火を睨み付けていた。

※

「アラタカ、足抜けしたいんだって？」
豪華な船室。その部屋のベッドに、霊幻は特注のメイド服に着替えさせられて、座っていた。イケメンの趣味らしい。ロングスカートのクラシックな白黒のメイド服に霊幻の髪の色と同じツインテールのウィッグを着せられ、レースのヘッドドレスのカチューシャと銀縁の伊達メガネをしている霊幻は、少し遠い目をしていた。
「そんなのダメだよ……って言ってもきかないだろうねぇ？僕の誘いをずーっと断ってきたアラタカだもの。ねぇアラタカ、島も、国も、アラタカが欲しいならあげてもいいんだよ？」
「……いらない、って」
「本当に無欲だなぁ、アラタカは」
困ったように笑うイケメン。
「アラタカ、１つゲームをしよう。これから僕は君を追いかける。逃げ回る君がこの船から脱出できたら、僕は君の卒業を笑顔で見送ろう。でも、僕に捕まって脱出できなかったら、君は僕のモノになる」
「……いいのか？」
「ただし、色んな障害物を設置してあるからね？……いっぱい穢されたアラタカに逢えるの、楽しみだなぁ」
イケメンの歪んだ目に浮かぶよからぬ光。
「……分かった」

「じゃあ、５分経ったら追いかけ始めるから、せいぜい逃げるんだよ？はい、スタート」
霊幻が駆け出す。着せられたメイド服の長いスカートがふわりと翻った。
「エクボっ、鬼に見つからないようにっ、細工とかできるかっ？」
イケメンといた部屋は船の最上階だ。
「目眩しならまかせとけ！」
出口は４階層下のメインデッキである。霊幻は階段を探して、メイド服をはためかせながら船内を駆け回った。
「おや」
ようやく階段がある部屋を見つけた。それは船員のいる、操舵室だった。
「可愛らしいメイドさんだ。ボスの探し人ですな？」
船長らしい壮年の男性がジロジロと霊幻を見回す。
「さて、ボスに通報してもいいのですが……我々も長い航海で女日照りでね。……ちょっと楽しませてくださいよ」
こんな所で最近使いまくって減っている俺様の霊力を使う訳にもいかなかった。
霊幻は無理矢理、跪かされて、ぐいっと船長の逸物を唇に押し付けられる。
「……噛みちぎられてーか」
船員は５人。
残りの船員のは無遠慮に服の上から霊幻の胸や尻を撫で回し、メイド服の中に手を差し込んでいた。
「まぁまぁ、そんなにカッカせず」
「ふぐっ」
無理矢理四つん這いにされた霊幻の鼻がつままれる。
息が苦しくなって開けた口に入れられたチンポを、霊幻は迷わず噛んだ。
「ぎゃあっ！？」
男の１人が股間を押さえて床に転がる。
その隙に逃げ出そうとした霊幻は足首を掴まれて転倒した。
「離せこの野郎！」

「おい、手ぇ押さえろ！」
引きずり倒された霊幻のメイド服の胸元は破られ、スカートはスリットの様に裂かれる。
「いい格好じゃねぇか」
げらげらげら。
手足を屈強な男たちに押さえつけられたみじめな姿に、下卑た嘲笑が落ちる。
「うるっせぇ変態どもが！！離せ！！……っぁ、やめろっ……」
男の１人が、女モノの可愛らしい下着の上から霊幻の性器をしごく。
「感じてんじゃねぇか、世紀の天才淫売先生様よぉ？」
「やめろっ……！さわる、なぁ……っ、ぁあ……っ！」
びゅる、と霊幻が精をこぼす。
「可愛らしい声で鳴くじゃねぇか」
男の１人が霊幻の胸をまさぐりながら、顎をくいと持ち上げて口付ける。
がりっ。
「！いっ、てぇ！！」
霊幻が男の舌を噛んだ。男の舌がまさぐっていた唇が、血で紅でも差したように赤く染まっていくのが、妙に色っぽい。
「よっぽど『仕置き』されてぇみてぇだな、先生？」
ぶちぶち。女モノの下着を引きちぎり、男がガバッと霊幻の足を広げさせる。
ひくっと霊幻が息を呑んだ。
「こいつは色狂いの淫乱だ。犯してやりゃあすぐ足腰までガックガクになる。そんな姿でボスから逃げられるのか、なぁ、見ものだなぁ？」
「だ、っれが、色狂い、だっ……あ……っ！」
１人目の男に挿入されて、耐えるように霊幻はぐっと目を瞑った。
「おい、腰が逃げないように押さえておけ」
ぬっと何本も腕が伸びて、無遠慮に霊幻の腰を押さえる。
「んっ……ぐぅっ……んっ、んっ……」
無遠慮に揺さぶられて、ふぁさふぁさとツインテールとヘッドドレ

スのレースが揺れる。
「く、そっ……」
霊幻の性器がプクッと大きくなり、すぐさま精を吐いた。
「うぉっ」
霊幻のナカを味わっていた男がカクカクと腰を痙攣させる。霊幻の絶頂で蠢いた内部に耐えきれなかったのだ。
「すげぇいいぞ、こいつの中」
「どけ、次は俺だ」
ドロリと精液が溢れる後口に２人目の男が挿入する。
「ははっ、最高のオナホじゃねぇか」
パンッ！パンッ！と大きな音をさせて腰を打ち付けて、霊幻の奥に白濁液を流し込んだ。
「ぁうっ……」
悩ましげに目を伏せた霊幻は、びりびりと身体に走るメスイキの余韻を、ぎゅっと指を握って逃そうとする。腰を押さえられていては、性感帯を逃がすこともできないでいたのだ。
「おいおい、もうガバガバなんじゃねぇか？」
３人目の男が嘲笑いながら挿入する。
「ほら、もっと締めろよ」
きゅ、と乳首をつねられて。
「バカやめ……っ」
びりびりびり、と強いメスイキに襲われ、霊幻の足の指がきゅうっと縮まる。
「あひっ！？」
３人目の男は間抜けな声を出して、カクカクと腰を揺らしながら霊幻のナカに搾り取られていた。
「腐っても高級娼婦様だなぁ。さてと、やっと俺の番だ。はは、精液でドッロドロじゃねぇか。女のマンコみてぇだな」
４人目の男が逸物を取り出す。巨根といって憚らないソレに、霊幻の顔が引き攣った。
「あ、あぁ……っ」
ゆっくり挿入されて、霊幻の全身が総毛立つ。
「ぐっちゃぐちゃに濡れていい感じだぜぇ……？おっ、ココか」

こつ。奥の行き止まりを叩かれて、霊幻の顔が青くなる。
「や、やめ……、そこ、入らな……っ」
「オス子宮ぶちぬいてやるよっ、ほらぁっ！」
ごちゅん。
「かはぁっ……！」
見開いた霊幻の目からつうっと何本も涙が流れ落ちる。
「ぃぎいっ……！イってる、から、動く、なぁっ……！」
「聞こえねぇなぁ？」
ぐぽっ、ぐぽっと男はＳ状結腸を何度も犯す。
「いやっ……あぁんっ、いやだぁ……っ、あ、あぁ……っ」
ドロリとした涙が霊幻の瞳を膜のように覆う。
「ほらっ……種付けしてやるよ……ッ！」
「いやだあ……っ！」
ぐっぐっと腰を押し付けながら長い射精をした男は、満足気にため息をつきながら性器を引き抜く。
その瞬間。
霊幻の膝が４人目の男のアゴに綺麗にキマった。
「がっ！？」
その反動で起き上がった霊幻は腰を押さえていた男２人の頭を掴み、ガツンと思いっきり衝突させて気絶させる。
「は！？」
頭の上に陣取っていた男の横っ面に、これまた綺麗に裏拳をキめる霊幻。
「……男ってのは、出すと油断するんだよなぁ」
呻く男たちをローファーで踏んづけながら乗り越え、霊幻は震える足を叱咤しながら階段に向かった。

※

第２階層。俺と霊幻は走り回って、階段を見つけた。が、その周りに黒服が５人ほどたむろしている。下品な話で盛り上がっている男たちの前に、『レイプされてきました』という格好で行くのは嫌過ぎる。

どうしようか……と考えあぐねていると、暗がりからヌッと出てきた手に霊幻が捕まった。
「んんっ！？」
「お嬢ちゃん、シーっ、静かに。俺はアンタの味方だよ？」
黒服が霊幻を抱き締めまさぐりながら片手で口をふさぐ。
「階段を探してるんだろう？俺なら人のいないハシゴを教えてやれるぜぇ？取り引きといこうや、お嬢ちゃん」
ずるずると霊幻を人気のない方に引き摺り込みながら、男が霊幻の口をぐにぐにと無遠慮にもむ。
「まだ綺麗なそのお口でしゃぶってくれよ」
「……本当にハシゴの場所を教えてくれるんだな」
霊幻は跪き、黒服の前をくつろげさせる。
人よりも少し長いサクランボ色の舌が、こちゅこちゅと男の逸物の裏筋を擦る。
「ん……」
霊幻が男の怒張を口に含むと、苦しさに息が漏れて、それが妙に悩ましげに響いた。
「……っ、もっと本気で御奉仕してくれよっ、メイドさんっ……！」
がっ、とツインテールをハンドルのように掴んで。
ごちゅんごちゅんと、下生えに歯が当たる勢いで男が霊幻の頭を前後に揺さぶった。
「おごっ！あがっ！おえ……っ、あぐ！」
ごぽっごぽっと淫猥な水音を響かせながら、黒服が霊幻の口を穴として扱う。
窒息しかけた霊幻がぐりん、と目を白目にした瞬間。
「……うっ！」
黒服が霊幻の喉奥に精液を注ぎ込んだ。
「んぐっ……おえっ……げほげほげほ！」
なんとかそれを飲み込んだ霊幻が息を整える。
と。
「うごっ！」
霊幻は黒服の股間に思いっきり頭突きをキめた。

「……ハシゴはどこだ」
黒服はプルプル震えながら奥を指差す。確かにその床にはハッチのようなものがあった。
「嘘だったら戻ってきてもっかい金的だからな」
走ってハッチに向かう霊幻。
バルブを回して蓋を開けると、下の階に向かうハシゴがあった。
階段と違ってハシゴだと、足を下ろすたびにナカから精液が出てくるみたいで、霊幻は不快そうだった。

※

第３階層。
すんなりと階段が見つかってホッとした時だった。
ガツッと霊幻の頭に衝撃が走る。銃底で殴られたのだ。
「ぐっ……！」
よろけた霊幻の手を取り素早くダクトテープで固定する黒服。
隠れていた男たちがぞろぞろと２人出てきた。
「新隆ちゃんつ〜かまえた♪つっても俺ら鬼じゃないけどな」
「もうぼろぼろじゃん。まぁ、俺ら気にしないけど」
「そーそー、いっつもボスが新隆ちゃん抱いてんの見せつけられるばっかりで、馴れっこだもんなぁ」
腕を縛った霊幻を床に転がす３人。
「なぁ新隆ちゃん。『キスして』って言ってみ？『××くん、キスして』って」
「だっれがそんなこと……！」
「言うこときいたら逃してあげるよ」
「……！」
目を見開いた霊幻が少し悩み、そっとこちらをみる。すまんが霊力は無駄遣いでき無ぇ。乗り切ってくれ、霊幻。
「……分かった。××くん、キスして」
「おっけ〜いいよぉ？新隆ちゃん」
無遠慮な唇が霊幻の口を食み、ベロベロと甘い口の中を蹂躙する。
「新隆ちゃん、もっと恋人みたいにしてよ。ねぇ俺のこと好き？」

「んっ……すき……」
「えーずりぃ。俺のことは？◯◯くん好きって言えよ」
「ふぁっ……ん、ぅ……◯◯くん、すき……」
「アッハハ、誰でもいいんだ、このビッチが」
ぐり、と性器を革靴で踏まれて霊幻がびくりと身体を震わせる。
「俺は普通のキスはいーや。コッチで子宮にディープキスさせて？」
カチャカチャと音をさせて黒服が怒張を取り出す。
「ね、新隆ちゃん。『□□くんのオチンポ入れて欲しい』って言えよ」
「……っ、□□くんの、おちんぽ、入れて……っ」
「えーどうしよっかなぁ〜？『新隆のおまんこに、□□くんのオチンポ入れてください』って言えたら挿れたげる」
余りに屈辱的なセリフに霊幻の顔が蒼白になる。
「……っ、あ、新隆のおまんこに、□□くんのおちんぽ、いれてください……っ」
「よろこんで！」
霊幻の足を持ち上げて、黒服がずちゅんと性器を挿入する。
「はぁっ、はぅっ、新隆のナカ、あったかくてキュウキュウ締め付けてきて、最高だよぉ……っ！」
「うっ、ぐぅっ、ん、んぐうっ、」
へこへこと激しく腰を振られて霊幻が苦しさ 8 割、じわりとした気持ちよさ 2 割の声を上げる。
「新隆ちゃん、お礼は？ほら、チンポ挿れてもらったんだからちゃんとお礼言わなきゃ。『新隆をレイプしてくださって、ありがとうございます』ぅ、ってさぁ！」
「ぐ、ぅ」
ぼろぼろと霊幻が涙をこぼす。
……こいつら取り殺してやろうかな。いやでもラスボスがまだだし……。
「新隆をっ、レイプしてくれてっ、ありがと……っう、うう、うううえぇっ……」
途中から泣き声になったのを黒服たちはゲラゲラ笑いながら指差し

ている。
「かーわいいなぁ、新隆ちゃんは！ねっ、新隆ちゃん。新隆ちゃんは□□くんのことが大好きだよね？」
黒服は体位を変える。いわゆる種付けプレスってやつだ。
上向いた顔に残り２人が性器を差し出してきたので、霊幻は大人しくそれをペロペロ交互に舐めた。
「……□□くん、だいすき」
「嬉しいなぁ！じゃあ俺と結婚する？」
「…んぐっ、ぁっ、うん、する……っ」
「『新隆は、□□くんと、結婚します』」
「ぁっ、あらたかはぁっ、□□くんと、結婚しますっ……」
「嬉しいなぁっ！はぁっ、はぁっ、幸せにっ、なろうねっ！
うっ！」
ビュルビュルと奥に出され、ついでに顔にぶっかけられる霊幻。伊達メガネからドロドロと精液が滴り落ちる。
「はぁー、はぁー……良かったよ、新隆ちゃん」
約束どおり黒服は霊幻の手のダクトテープを外して、何処かに行ってしまった。
「オイ霊幻、あいつら鬼を呼びに行ったかもしれねぇ。早く逃げねぇと」
「……」
ぼんやりとした目の霊幻はピクリともしない。
霊幻の後口から、こぽりと白濁が溢れる音がした。
ヤベぇ。
「オイ霊幻！！」
「……あ、う」
何とか身体を起こそうとする霊幻。が、無茶な姿勢で犯されたせいか、足がガクガクと震えて上手く立ち上がれないようだった。
「──しっかりしろよ、霊幻所長！相談所のみんなが待ってるぞ！！」
ぶわりと。
瞳に炎が宿ったかのように、霊幻の目に正気が戻った。
「……っ、行こう」

手すりにしがみつきながら、第４階層に降りていく。
出口はもう少しだ。

※

よろよろと壁に寄りかかりながら、霊幻は出口を探す。
「あ、あった……っ！」
大きな出入り口。それを見つけた瞬間、パチパチと拍手の音が響いた。
「おめでとう、アラタカ。出口を見つけたね！」
そして、鬼に見つかった。
「……エクボっ、目眩しを！」
「おうよ！」
俺様は鬼のイケメンに閃光を……あ、あれ？
「……これなーんだ？」
イケメンはスーツの内ポケットから霊力封じのお札を取り出す。
「アラタカ、悪霊遣いなんだって？聞いたよ」
カツン。
イケメンが一歩霊幻に近づく。
「あ…あ…」
「当然、対策はさせてもらったよ？……ほらほら、逃げなくていいのかい！」
「一か八かだ。逃げろ、霊幻！」
霊幻は振り返って出口のドアを開ける。鍵はかかっていなかった。
が。
「……え？」
船は、出港した後だった。
遠くにうっすら日本が見えるばかりの、海、海、海。
「そ、んな」
最初からイケメンは、霊幻を逃すつもりなど無かったのだ。
へなへなと霊幻は欄干に縋り付く。
が。
その霊幻にタッチしようとした鬼を、気力を振り絞ってかわした。

「アラタカ、逃げてる間にだいぶひどくされたみたいだねぇ？……全部監視カメラで見てたよ。すごく興奮した」
「……ダラゴイはいつもそうだ。俺の嫌がることばっかりする」
「僕の嫌がることを先にしたのは君だろう！？君は僕に抱かれた時処女で、僕しか知らなかったのに——知らないうちに、色んな男を咥え込んで——！」
「……っ、無理矢理ヤったくせに、何を——！」
「だからそんなに色んな男としたいなら、させてあげようっていう愛じゃあないか」
イケメンの目がイっている。一歩前に出てきたから、霊幻が船尾側に一歩後ずさった。
「本当に汚いなぁ、そんなに汚れて穢らわしいよ、アラタカは！……でも大丈夫だよ。僕は、僕だけは、そんな君を愛してあげるからね」
打って変わって優しく笑うイケメン。いやこえぇよ。
霊幻とイケメンは同じ距離を保ったまま船尾側に移動していく。もうすぐ行き止まりだぞ、どうする……！？
「愛してるよアラタカ。僕とこのままハネムーンだ。大丈夫、みんなで可愛がってあげるからね、淫乱なアラタカのために」
１歩、２歩。徐々に追い詰められていく霊幻。
「ロシアでは面白おかしく暮らそうね？大丈夫、賢いアラタカならすぐ僕の右腕になれる。公私共に最高のパートナーを得られて、僕は本当に嬉しいよ」
とん、と霊幻の腰が、欄干の行き止まりに当たった。
「——つかまえた」
イケメンが飛びかかる。
霊幻は迷わず——欄干から飛び降りた。
「！？！？！？！？アラタカ！？おいスクリューを止めろ！！緊急停止だ！！」
霊幻の身体が真っ逆さまに高速回転するスクリューの上に落ちていく。
俺様はフルパワーモードになって……すんでのところで、霊幻を受け止めた。

「オイなんて無茶しやがる！！」
「……あいつから離れたら、お札の効力も薄まるだろ？だから、大丈夫かなーって」
「馬鹿野郎！俺様の霊力がもう少し足りなかったらミンチだったんだぞお前！！二度とすんな！！」
大声に耳をキーンと痛くする霊幻。自業自得だ。
「……このまま日本に戻るか？」
「いや、ダラゴイと少しだけ話をさせてくれ」
ふわりと甲板まで浮かぶと、ポカンとしているイケメンが霊幻を呆然と見ていた。
「ア、アラタカ……無事で、良かった……」
「モイ・ダラゴイ、『船から脱出できたら』俺の勝ち、だったよな？」
はっとイケメンが息を呑む。
「笑顔で見送ってくれよ？さようなら、モイ・ダラゴイ。愛してくれて、ありがとな」
悔しそうにイケメンが項垂れる。
その後、ぎこちない笑みを霊幻に向けた。
それを見た霊幻の投げキッスを残して、俺たちは日本の方に向かって消えたのだった。

※

「ここでいいのか？」
霊幻をこいつのアパートの窓から中に侵入させ、省エネモードに戻る。
「おー助かったわ」
ティッシュを取って身体を拭きながら霊幻が俺様に返事をする。
「しかしやったな霊幻、これで全部終わりじゃねぇか！！祝杯でも上げっか！？」
ぴた、と霊幻の動きが止まる。
振り返った霊幻がひたりと俺様を見て、ああ、と思った。
「いいや。……まだ１人、常連客が残ってる」

そうだ。そうだった。
「……俺とさよならしてくれるよな、エクボ？」
次は、俺様の番だ。
「……最後の予約、させてくれよ」
ああ、苦しい、しめつけられる、
「……コースは？」
いやだ、さよならなんて、ああ、おれも、
「全部で」
ほかのきゃくと、いっしょだ。

そんなのねぇよ、と彼は笑った。

続